
ピアノの絆

三沼 実里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピアノの絆

【Nコード】

N6522H

【作者名】

三沼 実里

【あらすじ】

ピアノ・エレクtoon教室に通う、「藤堂絆」（とうどうきずな）は、あるとき、一人の男子に出会う。名前は、「水谷蒼」（みずたにあおい）。蒼は、病気で母親を亡くし、学校に行かなくなっていた。けれど、蒼は母が好きだったピアノは続けてた。そんな蒼を絆は元気づけようとする……！！

オープニング

私は、「藤堂 絆」(とうどう きずな)。ここの、ピアノ・エレクトーン教室に通っている、中学2年生です!!

勉強も、スポーツも、全然ダメだけど、音楽エレクトーンに関してだったら、大得意!なのです。

学校生活では、普通の市立中学校に通い、友達は楽しい人がたくさんいて、この上ないほどのしんでいます!!!

この話は、私がピアノ・エレクトーン教室のいる場面から始まります。

どうぞ!!!

第一話

「はい、今日はここまで。絆ちゃん、上手になったじゃない！これなら、発表会、どんな曲でも大丈夫ね！！　ってことで、発表会の曲、決めておいてね。じゃあ、また今度」
「はいー！！！」

やった！　先生にほめられちゃったよ！超頑張って練習したかいがあった・・・！！

あ、そんなことより！！

早く発表会の曲、決めちゃわないとね。

さてと、自主練習室でも行こうかな？

あ、自主練習室っていうのは、狭い部屋にピアノとエレクトーンがひとつずつ置いてある部屋のこと、だれでも自由に使える部屋のこと。

そこに行けば、楽譜がけっこういっぱいあるから、曲を決めるには最適の場所なんだ。

そして私は、自主練習室へ向かった。

あれ？

私は足をとめた。

自主練習室のほうから、音がする・・・。。
めっずらしいなあ。めったに使う人、いないのに・・・。

自主練習室の前までいくと、やっぱり、人がいた。
どうしよう。いきなり入って行くのは、失礼だし……。
仕方がないから私は、そばにあったイスに腰かけた。

)

・・・よく聞いてみると、すっごくキレイな曲だなあ……。
これはピアノの音だけど、エレクトーンでも弾けたらいいな……。
でも、弾いている人も上手だな。なんか優しい感じがする。
つて、感心している場合じゃないよ。どうしよう。静かに入っちゃ
おうかな……。

・・・カチャ。

・・・!

私はちよつとだけビックリした。ピアノを弾いていたのは、男子だ
つたからだ。

別に、男子がピアノを習っているのは全然めずらしくないけど、弾
き方とかからして、優しい感じだから、なんとなく女の子かなあ？
つて思ってたから、意表をつかれた。

何はともあれ、私はエレクトーンのそばに、持っていたカバンを置
いて、楽譜のある棚へと歩いた。

第二話

私が楽譜の入った棚を開けようとした瞬間、今までなっていた曲がピタツととまった。

「・・・・・・・・」

どうしよう。なんかすごい気まずい……。

「あ、あの、お邪魔してすみません。どうぞ、続けてください……」

私は作り笑いを浮かべながらそう言った。

「・・・・・・・・べつに。曲が弾き終わったただけだから、気にしなくていいよ」

「・・・・・・・・よかった。気は悪くしていないみたい……。」

「あの、今の曲、すごいキレイな曲ですね。……なんていう曲なんですか？」

私がそう聞くと、ピアノのイスに座っていた子の目が、驚いたようにちよつとだけ丸くなった。

「・・・・・・・・この曲、知らない？」

「・・・・・・・・私、変なこと聞いたかな？ それとも、この曲って、すごい有名な曲なのかな？」

「ごめん。私、エレクトーンなんだ。だから、ピアノ用の曲、よく知らなくて……」

あれ？何謝ってたんだ、私？

「別に謝らないでも。……この曲は、「メヌエット」っていうんだ」

「へえ……。……でも、本当、キレイな曲だね。……エレクトーンでも弾けないかな？」

私はそう言ってから、目の前にある楽譜の棚を開けてみた。

「ん〜と。……無いなあ……。……でも、弾きたいなあ……」

私がそうつぶやいていると、

「ピアノのならあるけど・・・？ダメ・・・？」

「えっ！？本当に？じゃあ、ちょっとだけ見せて！！」

男の子は私に楽譜を貸してくれた。

うん、ちよつとよくわからないところもあるけれど、何とか弾けそうだな！

）

やっぱりキレイな曲・・・。弾いてみて実感するよ。

「はい、楽譜。ありがとう、貸してくれて」

私は楽譜を男の子に返した。

「うん」

男の子は、私から楽譜を受け取った。

「ねえ。名前、なんていうの？」

私は、なんとなく聞いてみた。

「おれは、「水谷 蒼」（みずたに あおい）だけど？」

「へえ〜！キレイな名前だね。あ、私は、「藤堂 絆」（とうどう

う きずな）っていうんだ。よろしくね！！」

「うん」

・・・なんか自己紹介しちゃったよ。ま、いつか。

「じゃあ、蒼くん。いつも自主練習室じゆしんじつしつに来てるの？」

「うん、たまに・・・藤堂さんは？」

「私もたまに。今日は発表会の曲を決めにきたんだけど・・・。もうこんな時間だし、明日にしよう」と

私は置いておいたカバンをつかんだ。

「じゃあ、明日も自主練習室じゆしんじつしつに来るの？」

「え？ うん、そうだけど・・・どうして？」

私は蒼くんの質問に、ちよつとビックリした。

「じゃあ、おれも来ようかな・・・」

「えっ？ 本当？ じゃあ、また明日！ーじゃあね！」

私は、そう言って、自主練習室を出た。

第三話

次の日。

「おっはよ〜!!」

私は校門のそばにいる、「相田 美海」(あいだ みみ)に声をかけた。美海は私の親友なんだ。

「あっ、やっと来た!! おそいよ、絆!!」

「ごめん、寝坊した・・・」

「まあいいよ。いつものことだからね。もう慣れちゃったよ」

美海があきれ顔で私のことを見ている。

「もー。美海・・・変なことに慣れないですよ」

「だって、絆、二日に一度は寝坊するじゃん!!」

「そうですよねー。すみませんでしたー」

そんなことを話していると、教室についていた。

「あっ、おっはよー、絆と美海!!」

「おはよ、夏来」

夏来は本名「山沢 夏来」(やまさわ なつき)。このクラスの中の心的存在。だれにでも優しく、顔も可愛いから、このクラスの人気者なんだ。

「絆、また寝坊したんでしょ？」

「えっ? なんでわかるの、夏来？」

「ははっ、だって、かなり寝ぐせついてるもん!! いつものことだけど、今日はまた、いちだんとひどい」

「・・・うそー!! 最悪〜!!!・・・直す時間どころか、鏡を見る時間も無かったからなあ・・・」。

「本当、山沢の言うとおりだな。相変わらずひどすぎだろ、藤堂の髪型」

「なによ!! 木立きたちだって、人のこと言えないじゃん!! 何その髪型!! 前髪はねてるし!!」

「なっ……。これは寝ぐせじゃねえ!!! ……少なくとも、おまえよりかは数倍マシだ!!!」

「ふーん、どうだか」

木立、本名「木立 享」(きだち とおる)は、このクラスで一番バカな男子。だから、いつもムカつくことばかり言ってくる。

「はいはい、二人とも。そろそろ先生来るよ?席に着いたら?」

夏来がケンカを止めてくれる。確かに、もうチャイムは鳴っていた。

このクラスは、本当はみんなすごく仲のいいクラスで、すごく楽しいクラスなんだ!!!

まあ、私と木立はケンカばっかだけど。

第四話

「・・・絆と木立って、仲良いんだか悪いんだか、わかんないよね？美海」

「うん。夏来の言うとおりだね」

後ろで夏来と美海が話している。

「ちよつと！！ 何それ！？ ぜったい仲悪いでしょ？」

私はおもいつきり叫んだ。

「だってさあ。ケンカするほど仲がいいっていうじゃん？ まさし

くそれじゃない？ 絆と木立」

「・・・んなわけないよ。まったく・・・」

「あ、それよりさ。今日遊ばない？ ヒマだし」

「いいね！ 絆も行くでしょ？」

えっ・・・。あ、今日って・・・。

「ごめん。今日エレクトーン教室行かないといけないんだ」

「え〜？ 絆、昨日も行ったんじゃないの？」

「そうだよ。付き合い悪いよ？」

私が断ると、夏来と美海が文句を言ってきた。

「ごめん！ 発表会近いからさ。曲を決めないといけないんだ。そ

れに・・・」

「「それに？」」

夏来と美海の声がぴつたりと合う。

「あのね・・・」

私は蒼くんのことを全部話した。

「へえ〜。そうなんだ。ねえ、その子ってかつこいい？」

夏来が目をちよつと輝かせる。

「わかんないよ。まともに顔を合わせたわけじゃないんだから」

「え〜？ じゃあ今日行って確かめてきなよ！」

もう、夏来ってば・・・。

「そんなこと言って。ほんとに夏来は……」
でも、蒼くんと友達になれたらいいな。すっごい優しそっだったか
らなあ……。。

キーンコーンカーンコーン

「あっ!! やばっ! 授業はじまっちゃっ!! 行こっ!!」
「うん!!」

第五話

「じゃあね、絆。また明日ね」
美海と夏来と別れる。

「うん、じゃあね〜！」

・・・蒼くん、今日来るって行ってたよね・・・。
なんかわからないけど、楽しみだなあ・・・。

「先生！！ こんにちは〜っ！！！！」

「あら、絆ちゃん？ どうしたの？ 今日はレッスンないわよね？」
ここはエレクトーン教室。いつもの先生を見つけて、私は声をかけた。

「うん、そうなんだけど。発表会近いし、曲も決めたいし、それに・・・。」

「それに？ どうかしたの？」

先生が不思議そうに私を見る。

「・・・昨日、自主練習室で、蒼くんって人にあっただ。それで・・・。」

私は昨日のことを先生に言った。

「えっ！！ 蒼くと話したの!？」

「えっ・・・と、話したけど・・・。でも先生、なんでそんなに驚くの？」

「・・・いやっ、なんでもないのよ。ほら、蒼くんって、確かピアノだったでしょ？ だから・・・。」

・・・先生、どうしたんだろう・・・？ なんか変・・・。それに、なんで蒼くんのごとで、あんなに驚いたんだろう・・・？
まあ、いいか・・・。

カチャ・・・。

私は自主練習室のドアを開けた。

「・・・蒼くんは、まだ来ていないんだ・・・。」

「じゃあ、弾いてよっかな」

私は、独り言を言っつて、エレクトーンの前に座った。

「・・・蒼くんが弾いてた曲・・・。確か、「メヌエット」って言った・・・。すごく、キレイな曲だったなあ・・・。」

でも、エレクトーンでも、弾ける曲なのかわからないしなあ。

もし弾けたら、発表会で弾きたいなあ・・・。」

ガチャ。

「・・・藤堂さん・・・？」

「あつ！ 蒼くん！ 来てくれたんだ！！」

よかった。蒼くん、来てくれたよ。実は、ちょっと心配だったんだけど・・・。」

「・・・一応約束したし・・・。今日、来るって・・・。」

「そうだね！ そうだよね！ よかった・・・。」

よかった、来てくれて。あ、そうだ。メヌエットのこと、聞いてみよう。

「ねえ、蒼くん。昨日弾いてた曲・・・メヌエット？ って、エレクトーンでも、弾ける？」

「・・・わからない、けど・・・。楽譜とかがあれば・・・弾けるんじゃない・・・？」

「そっか。いや、あのさ。私、発表会の曲、決まってるって・・・。もしできたら、メヌエットが弾きたいなあって、思ってたんだ」

やっぱり、先生に聞かなきゃ、わからないか・・・。」

「蒼くん。ありがとう。私、先生に、楽譜があるのか聞いてみるね」

「・・・うん」

蒼くんが、うなずいた。

「じゃあ、ちょっと行って来るね」
私はそう言って、自主練習室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6522h/>

ピアノの絆

2010年10月21日22時24分発行